

# おもい月記の

思い \* 思い

kōshō. 1

このおもい月記は仏様の御悟りや親鸞様の生かされて生きると言う思想を愚鈍な私が理解できる範囲で書いたものです。

魚や動物には口があるが音や声は出しても言葉は出ない何故かと言うと人間以外の口をもっているものは顎が出ているからである、人間は地球が四〇数億年前に誕生した際表面張力によって海が誕生し空気が滞留し微生物が誕生しそれを食しながら魚が誕生しそれに足や手が出て丘に上がり類人猿（人間の祖先）になっていったのだ、やがて二足走行する事により顎が下がって発音出来る様になる、言葉が出るようになると表現が出来るようになる、表現が出来るようになると心の誕生になる、心の誕生と同時に相手を讀えたり、喜ばせたり、逆に相手を傷つけ悲しませる言葉も出てくるようになる、したがって法律や憲法によって規制しなければならぬのであるが、心まで規制したり罰することは出来ないのである、だから宗教が出来る、世界の中では大きく三大宗教がある一つはイスラム教（コーランのアラーの神え絶対服従の教え）二つにはキリスト教（イエスキリストの愛の宗教）三つは仏教（釈迦如来の慈悲の教え）をそれぞれに、いろんな解釈をつけて宗派を築いてきたのが今日で、三宗教合わせると何万という宗派、宗教があるのだがイスラム教もキリスト教も人間であるが神なのだ我々には神の傍には行けても神になることが出来ないのである、一方仏教は仏になることが出来るのである、お釈迦様は一切衆生、生けとし生きるもの山川草木皆仏性と言っている、要は不思議な縁によってこの世に誕生し息を吸って命あるものを食しながら人間世界を終えて行くその先はまた不思議な世界に戻るのである、これを親鸞聖人は「南無不可思議光」と言っている南無とは帰命（命が帰る）という、毎日私達は不思議な縁によって生かされているし帰る家がある、一生を生きた時に命の帰る家（浄土）がなければ今を大切に生きることは出来ない、不思議な縁（光に照らされて生かされる）、可能な事を「南無不可思議光」の言葉が南無阿弥陀仏（ありがとう）と口からでるのではないだろうか。